

宗教心



クルト・ブラッシュ

鳥は無心に飛び、魚は自然に泳いでいる。

そこに見えるものは自然であり、自然美である。意識と知識とに生きる人間には意識的な動きと無意識の動きとがある。それがため、そこには人為的な美と無作為的な美が生まれる。意識的な動きにはわざとらしい無器量からくる醜さが伴うこともある。

このように動きは美とも醜ともなっており対立する。従って対立観念において同じものが分別して対立するという矛盾がおこる。人間はものを理解しようと思えば、必ずものを二つに分けて、対立を設ける。これは分別意識で

あって、このようにものを相対的に考え、差別意識が存在する間はものの全体をとらえることはできない。ものをありのままの姿にとらえることを禅宗では「無分別智」と呼んでいる。それは知るものと知られるものとの対立を超えた高次の智慧をもつことである。

われわれの生きている人間社会には、かならず矛盾が伴う。それはものをありのままの姿にとらえることがわれわれに出来ないからである。客観的にとらえるべきものが、いつも主観的な働きに左右されている。それ以外にわれわれは人間であるにもかかわらず、ま

た、高度の人間性をもたないからである。では高度の人間性とはなにか。そして、その価値判断はなにによってなされるか？

われわれにはその基準を見出すことは出来ない。そして、絶対的な人間性をはかる尺度もない。人間性についての研究はあらゆる時代にわたってなされて来た。しかし、二度の大戦を含むあらゆる戦を経験して、いっさいの人間的な価値が動揺している現代にあっては、人間性の本質そのものが根本的に問いなおされなければならない状況に直面している。

自然科学が今日のように発展する以前には恐らく、人間は常に人間以上のものを求めていたであろう、そして、神を最高のものと考へていたに違いない。しかし、月の世界への旅、原子力発電など、あらゆる科学の急速な発達によって、神を信ずるものは減少して行く一途である。

では宗教はもう必要とされないのであろうか？その答えは「イエス」であり、「ノー」でもある。ハッキリした解答は危険である。宗教は宗教のための宗教であってはならない。信仰も信仰のための信仰であってはならない。宗教は生活のためにあり、生活を離れた宗教はただ一つのドグマとして、知識のための教理である。また、かりに宗教を深く信ずることが出来ても、その教理におおはれている間は、まだほんとうの宗教になってはいない。人間には応々にして他の宗教を排斥する傾向がある。排他的であるということは、その人に宗教があつて、宗教心がないからである。では宗教心とはなにか？簡単に答えれば、それは「愛」、「慈悲」である。キリスト教は愛の宗教といわれるほどに「愛」はキ

リスト教教理の中心的地位を占めている。コリント前書十三―に「山を動かすほどの充ちた信仰をもつていても、愛がなければ、無にひとしい。たとひ私が、すべての財を施し、この体を焼かれるために与えても、愛がなければ、益するところがない。愛は寛容で愛は慈悲にもとむ。愛は妬まず、誇らず、たかぶらない」とある。

キリスト教の愛はこのように「大愛」であつて、神を愛するがゆえに、また隣人をおのれのごとく愛し、汝の敵を愛さなければならぬ。それに反して、仏教の「増支部教典」は「愛より愛は生じ、愛より憎しみは生じる。憎しみより愛は生じ、憎しみより憎しみは生ずる」と説き、愛が深ければ深いほど憎しみの生ずる可能性も大きくなると見る。それは愛が本質的に、自己を愛することを中心としているからであつて、相手を愛するといふことの裏には、自分を愛してもらいたいという欲望が多分に含まれている。それがため仏教では愛を煩惱の一つとして見ている。

仏教では、生死流転する迷いの世界を欲界、色界、無色界の三段階に分けて之を「三界」といつている。欲界は性欲と食欲、色界

は物欲、名誉欲、権力欲などであり、無色界は物質を厭い離れた、いわゆる物質を超えた世界である。

欲界に属する性欲と食欲とは本能的であると同時に知的でもある。性欲をなくしては人間の繁昌は考えられないと同様に、食欲なくして健康な肉体を維持することは困難である。従つて、これらの欲をなくすることはできない。

人間は一度大きな楽しみを経験すれば、それをもう一度味わおうとする。経験を忘れず記憶することが人間の知的な働きであつて、それによつて、本能的な性欲が知的な姪欲となる。食欲においても同じことである。生きるための食事が贅沢なご馳走のための食事へと変るのがそれである。色界に属する物欲、名誉欲、権力欲などは完全に知的な働きからくる、人間独特の欲である。しかし矛盾することは、人間から物欲をなくしてしまえば、進歩性は減退するというよりも、なくなるであらう。従つて、この矛盾を克服する唯一の道は欲の限界を知ることである。

人間は常に苦楽の世界に沈んで束縛される。これは意識無意識のうちに我欲、我執の

目的を達しようとする発動する心の作用によって
管なまれるものである。かかる心の作用―煩惱―の実現を妨げる精神作用のすべては仏教の最高目的を標準として生れた「悟り」に帰結する。

キリスト教は煩惱よりも罪にたいして、多く語っている。欧米の罪という言葉には法律を犯す罪、即ち、クライム (Crime) と宗教上の罪、即ちシン (Sin) との二つがある。罪の浄化に対する懺悔は仏教にもキリスト教にもある。仏教では「悔過」といい、キリスト教、特にカトリック教では「告白」するといふ。

アダムとエバとの罪には「シン」のみならず欲も含まれている。それを知っていたのは蛇である。蛇は二人を誘惑した。神にその罪を問われたアダムはエバにすすめられて食べたといふ、エバは蛇にいわれて食べたといふ。これは責任回避であつて、罪をつくつたものは蛇、蛇をつくつたものは神、という矛盾が残る。

キリスト教の「愛」にたいして仏教では「慈悲」が中心となる。それは特定の人に対

してではなく、すべての人々に友情、同情をもつことである。そして、特に苦しみに悩んでいる人を真実にいたわり、思いやることである。この意味における仏教の慈悲とキリスト教の大愛とは大差はない。否、慈悲や大愛が宗教心であつて、宗教はあらゆる宗教や宗派を超えた教理でなくてはならない。

しかし、キリスト教はキリスト教、仏教は仏教であつて、両者の共通点は共に宗教であること、そして信者に宗教心を植えつけることである。キリスト教と仏教とを混同することは危険である。それはあたかも、英語と日本語とを混同することに似ている。両者の共通点はただ言葉であるということだけであつて、両国語を混同することはゆるされない。

キリスト教と仏教との最も対照的であるものは、イエス・キリストの十字架上の死と釈尊の死を象徴する涅槃とである。キリストの受難と死という歴史上の出来事によつて、人類の罪の救いがなし遂げられたと信ずることが、十字架の贖罪の死であつて、「イエス・キリストを信ずることによつて、すべて信ずるものに与える神の義である」と説明されている。「義」ということばは「ただしい」と

いうことである。

このように、キリスト教思想の特徴は何かといえば、愛、原罪、十字架、贖罪、創造神、復活であろう。これに反して、仏教思想の特徴は、苦、煩惱、涅槃、縁起、輪廻、業、空、無、無我、無常であろう。キリスト教の基本的教理は神の子イエス・キリストにおいて啓示された唯一の神と、その愛と恵みとによるたましいの信仰に帰するということである。神の子であるイエスはパーソナルな神であるが、仏教にはそれが無い。釈尊、即ちゴータマ・ブッダは神でもないし、また、キリスト教という絶対超越者としても認められていない。ブッダとは覺者のことである。

キリスト教は信仰崇拜の対象としての神を説き、それは一般に超感覺的な存在であり、この世界を創造した力になった人格的な存在であるとされている。仏教には創造者と呼ばれるものがないと共に、一般的な「神」も存在しない。そして仏教には始めがなければ終りもない。この点がキリスト教と全然異なる点である。もう一つ大きな相異点は、西欧では世界観から宗教と哲学とを独立させ、宗教も神をただ信仰の対象のみとせず、神が中心

となる神学にまで作り上げた。すなわち、宗教の科学化である。そして、哲学は論理、物理、倫理の三つの科学に分けられた。

東洋では宗教と哲学とは世界観または人生観から分離せず、相互の関係において両立している。従って、仏教には哲学的な思想がキリスト教よりもはるかに多い。仏教の根本思想をなす「空」は最初に宗教的実践体系のうちにあらわれたのであるが、「空」は宗教的というよりも哲学的に見なければならぬ。仏教が難解とされているのは、宗教と哲学とがどこかでオーバーラップ（重複）されているということよりも、仏教自体が密教と顕教、自力と他力とに分れ、その教理が相反しているからである。ここに仏教の矛盾がある。そして既に述べたように、仏教は宗教のための宗教であって、各派は自己の教理を擁護するため他の宗派を非難する傾向が強い。

他を妬むことは、仏教でいう煩惱の働きであって、人間の煩惱は菩提心、すなわち仏の心に通じるものであると教える。それを「煩惱即菩提」といって、悟りの実現をさまたげるあらゆる精神作用である煩惱も、その本体は、真実不変の真如であるから、それを離れ

た法はない。そこに「さとり」（菩提）の名を立てて、煩惱と菩提との両者の「相即」を伝えるのである。

この「相即」という熟語は華嚴宗の縁起観を説く「相即相入」のことであって、それは一と多との関係で、一がなければ多は成り立たず、また多によって一が考えられるから、一と多とは密接不離である。「相入」とは一における働きは全体の働きに影響し、全体の働きから当然一の働きが考えられるから、これもまた密接不離であるとする。華嚴經の「一即一切・一切即一」、般若心教の「色即是空・空即是色」などの有名な句はみな「相即相入」といって、同体異体の二重性について考えるのである。しかし、同体というのは、議論のある概念であって、これを判然と捉えることが肝要である。これが仏教的な弁証法であって、キェルケゴールの弁証法と相並んで興味ある問題である。

「相即相入」という表現語はインド的な思想であるよりも中国的な思想の色彩が濃いの。中国的な思想は儒教と老荘との思想に分けられるが、仏教に老荘の思想が入ったのは竹林の七賢があらわれたころよりも後の六朝時代

の末期である。特に老荘の思想が強く表われている仏教は禪宗である。従って、禪宗も「即心即仏、即仏即心」の表現語を使って、心と仏との両者の「相即」を伝えている。

禪宗で唱える「即心是仏」とは、人間が本来もっている心（心性・仏性）そのまが仏であるという意味であって、それに似た禪語は「心外無仏」である。水と波とはそれぞれ形の異ったものでありながら、同一のものであるように、現実的な存在（宇宙間一切のもの）と真理ともまた同様である。そして、われわれ人間とか、人間の心というものも、そのような現実的な一切のものの中の一つであるから、人間ないし人間の心もまた、真理そのものの具体的なあらわれといえるのであって、そのような意味の心を、禪では人心とも心性とも、また那一物とも本来の面目ともいいあらわすのである。

ところが、仏教はあくまで宗教であって哲学ではない。したがって、宇宙いっさいの現実的なものをすべてを貫く真理を、ただ単に対象として理解するだけでは十分ではなく、絶対の真理も、現実的なもののすべてについて徹見（見性）し、それを生活化して、真理と

一体不二の關係になりきる(成仏)ところに、仏教の根本精神がある。ところが、われわれ人間は元來真理のあらわれであり、真理そのものにほかならない。それ故われわれは、まずこの真理をわれわれ自身について徹見し、自己のありのままのすがたをみつめることによって、現実的ないっさいのものの真実のすがた(諸法実相)を徹見することができるのである。これが生れながら自己に備わっている心性(仏心・仏性)を見抜くことであって見性することがただちに仏になるということである。禪ではこのことを「見性成仏」といって、禪門独自の語となっている。

自己が仏であるという仏教的な思想と「私は生きているが、もう私ではなく、キリストが私のうちに生きておられる」(ガラテヤ人の手紙二・二〇)というキリスト教の思想とは実に対照的である。キリストが私のうちに生きているということはキリストと自己とは二元的であることを語っているが、「即心是仏」とは自己と仏とが一体であることを示している。従って、キリスト教と仏教との根本的な差は、一方は「神」が中心となり、他方は人間としての「覚者」が中心となっている

ことである。

時々、思い浮べることであるが、もし恋愛がなければ芸術は生れなかったであろうし、死がなければ宗教が生れなかったであろう。ギリシャの哲学者エピクロスは「われわれがあるかぎり死はまだなく、死があるときにはわれわれはもはやいない」といつている。われわれは決して自分の死を自ら直接に体験することは出来ない。体験するのはすべて他人の死の現象である。従って、他人の死によって心が動かされるのである。

死をすべての生物における生の終末と見なさず、死後、靈魂が肉体からはなれて永遠に永続するという考え方は宗教的思惟である。靈魂不滅の問題はキリスト教、仏教あらゆる宗教や哲学思想の根本問題となっている。

聖書に「私たちが、キリストに希望をかけたのが、この世のためだけであるなら、私たちは、すべての人の中で、もっともあわれなものである。しかし、そうではない。キリストは、死者の中から復活して、死者の初穂となられた。一人の人間によって死が来たように、一人の人によって、死者の復活が来た」(コリント前書十五・十九)とある。仏教で

は復活という表現はあまり用いられないが、それに代る「輪廻」という思想がある。それはインド古来の考え方であって、人間が生死を繰り返すという思想である。

現代では宗教はもう見失われているという人がある一方において、現代ほど宗教を強く求める時代はいままでなかったという人もある。人によって、ものの見方、考え方は違う。それがため、もしいづれもが正しいといえ、それは矛盾する。すでに述べたように、われわれが生きて行くために一番肝心なことは、あらゆる矛盾を克服して行くことである。それは理論的に解明できるものではない。あくまで実践を通じて学び体得するという努力が必要である。従って、現代のように機械化された時勢においては、ドグマに捉われない宗教心を作り上げることが矛盾の克服であり、また機械化からの回避でもある。

(校友、ケー・ブラッシュ商会社長)

同志社とスポーツ



岡 仁 詩

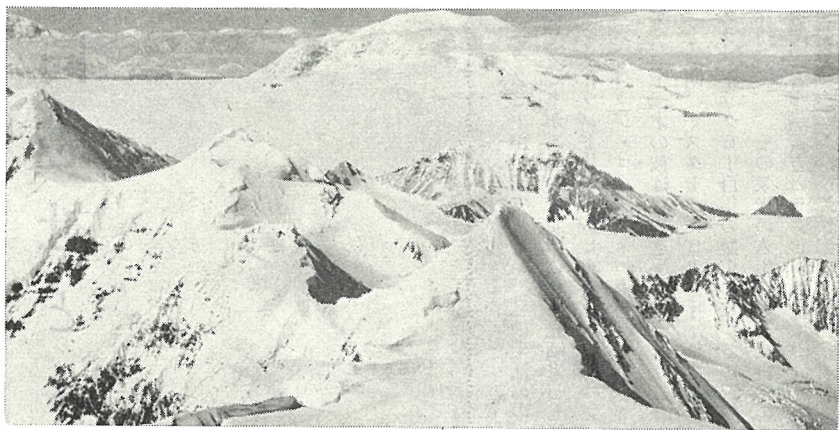
「ラグビーが生活ではない。私の生活の中にラグビーがあるのです」これは先頃来日したイングランド代表ラグビーチームのキャプテン、バッジ・ロジャースが語った言葉です。三十二才の彼は代表選手に選ばれること三十四回。ミスターラグビーと呼ばれてイングランドラグビー百年の歴史のなかでの記録保持者です。その栄光の人生に対して日本の新聞記者が「貴方のラグビー人生について」と尋ねたとき、まず、はねかえってきた言葉

が前述のものです。近頃就職に関してもスポーツマンを求むというのをよく聞きます。私どもにも求人があり「スポーツマンはいいですからねえ」といわれます。私はいつも一寸したとまどいを感じるのです。スポーツマンって何だろう？スポーツをしている人間のことだろうか？それがなぜいい人間なのだろうか？……と。

人の陰口をいう。会社の同僚のあらを探す。上司におべっかをつかう。たまたまそれ

がかなりのスポーツの選手生活を送った人間の場合、「なんてスポーツマンらしくない奴だ」と評価されます。しかしスポーツをやっていない人なら同じことをしても評価が違ってくるのでしょうか。人間として恥ずべき行為は誰であろうとその評価において軽重の差はないと思うのに……。

私はここでスポーツの良さについて今更語るうとも思わないし、無論スポーツの持つ良さを否定するものでもありません。しかしスポーツさえやっていれば良い人間ができるという飛躍には抵抗を感じるので。今やスポーツは社会現象として現代の社会に大きく存在しています。かつて洋画のベストワンに選ばれたアメリカ映画の「十二人の怒れる男」のなかにも、一少年の死刑が決定されるかどうかという瀬戸際だというのにプロ野球の切符の無駄になることばかり気にしていらいらしている陪審員がでてきます。これに近い現象は私達の日常生活のなかにもよく見受けられることがあります。スポーツの社会生活への影響力の大きさを示しているものでしょうが、考えようによれば暗い中に明るさを求めようとすると、やりきれなさを何かに求めよう



とする、そこにスポーツがとりあげられているようにも思えます。スポーツは明るいものと受けとられ、事実そう感じられているからでしょう。スポーツは全てそうでしょうか。オリンピック選手で自殺した田谷選手のスポーツ生活から明るさが感じられるでしょうか。

スポーツは阿片だといわれることがありません。苦しさ逃避してそれを求めたときスポーツの持つ種々の刺激は阿片にも代用されるかもしれません。そこには死への路もあり得るでしょう。ただ享楽に耽けるスポーツ馬鹿も生まれることもあり得ます。私もスポーツは本来明るいものだと思います。しかしそのために逃避の道具としてのみ用いられて、それに溺れることがあると暗いものにもなりかねないのです。スポーツの世界にだけ閉じこめることは非常に危険です。スポーツの世界で発揮されるスポーツマンシップが現実の社会で発揮され得ない弱い人間をつくるものにもなります。スポーツを行なう姿勢からスポーツ本来の良さが汲みとれるのだと思います。スポーツを行なうが故にスポーツマンではなく如何に取り組むかという姿勢によって、そ

の過程からスポーツマンが生まれるのです。とりわけ見るだけのスポーツは逃避を助長し易いようです。行なうことによりスポーツのなかに生活感が湧いてきます。そしてそれがチャンピオンスポーツ（競技スポーツ）として所謂心・技・体の可能性への挑戦であれ、レクリエーションスポーツとしての健康の求めであれ、生活の中に真のスポーツマンライクな面が生かされてくるのです。スポーツはそれを行ない、そしてその行なう姿勢というのがスポーツ自体を素晴らしいものにし、人間性を高め生活を豊かにするものだと思います。スポーツが勝手に私達に良いものを与えてくれるのではなく、そのなかから私達が良さをひき出さねばいけないのです。それが栄光のラグーマンにしても「私の生活のなかにラグビーがある」と素直に答えられる姿を生んでくれるのだと思います。生活のなかのスポーツとして、同志社という生活体のなかのスポーツとして、あらゆるスポーツ活動が盛んになることを願うと同時に、素晴らしいスポーツ活動を生活のなかに常に持ち得る同志社であらねばならないと感じるものです。

（文学部助教・大学ラグビー部総監督）

春季リーグ戦の

優勝をかえりみて

渡 辺 博 之

十一シーズンぶりの優勝、それは遠い回り道をしてようやく辿りついた栄冠だけに感激もひとしをだった。毎年のように今年こそはと、私なりに目標を立てながら、トレーニング、練習、オープン戦と、チーム力の向上を目指して努力してきたつもりだが、優勝にはいつもほど遠い成績に終わってしまう状態だった。

野球部は今年も、例年通りのスケジュールで、徳島県の小松島市営球場で三月より合宿練習に入ったのだが、昨秋のリーグ戦の成績が上位であっただけに、各関係方面の期待が大きく、それが一層私には負担となつて責任の重大さを感じつつ、なんとかしても悲願を達成したいとの決意で望み、幸いキャンプも順調に打ち上げ、四国路、山陽路と転戦しつつ、チームの戦力を検討してみたが、選手は私の想像していた力を充

分發揮するまでに致らず、戦績は満足できる結果ではなかった。しかしこれもキャンプでの猛練習の疲労と、なれぬ転戦のためだと自分を慰めつつ、オープン戦で掴んだチームの力を、帰京して休養をとり、調整すれば充分勝算あるメンバーでリーグ戦に臨める自信もできた。「好事魔多し」調整練習によって予期せぬ故障者、怪我人がでて、チームの構想を一からやり直さなければならなくなり、今シーズンもまた駄目かと、少なからず動揺したが、チームの志気を考え、自からハッスルすること、部員には精神力を強調した練習方法に切替えたのである。充分な編成と調整のできぬままに、リーグ戦の開幕となつたが、私の不安をよそにチームは順調に勝点を挙げ、僅かながら優勝戦線に向つて邁進できる可能性も見えてきた。こうなると練習での部員も

またやる気充分、自信溢れるプレーが目につくようになった。だが私には、このまま余勢をかって突走れる自信と、何かしら思わぬ落とし穴がどこかにあるような不安とが交錯して、眠れぬ夜や、夜中にフト目の覚めることも幾日あった。

いよいよ優勝を決める関学戦の日がきた。私は再度部員に、学生野球はあくまでも精神力での戦いであつて、そこに根性と気力の充実が生れ、チームプレイに徹する精神となつて力を發揮することができると強調した。優勝の瞬間、部員は感激の涙を流し、互いに労をねぎらい、讃えあつている姿は、久しく見なかっただけに、私もしらずしらず目頭の熱くなるのを我慢した。

優勝の原動力は、チームの和によるものだが、この栄光によつて部員は、日々の真剣な練習の積み重ね、気合を入れて学びとる重要さがいかに大切であるかを体験し、また教室では到底味わうことのできない貴重な経験を得たことだろう。この感激を終生忘れることなく苦境に立った時には思いだしてエネルギーとしてほしいものだ。

(工学部助教・大学硬式野球部監督)

同志社大学相撲部の今昔

北 村 光 雄

わが国におけるスポーツ、また、わが同志社におけるスポーツの歴史のなかで、最も永い伝統と歴史をもつものは相撲ではなからうか。同志社の相撲は普通学校の当時、南寮、北寮の対抗戦の時代から歴史が始まり今日に至る。その歳月は八十年を超えている。

今なお、元気で活躍の先輩では、前大塚総長、現泰理事長、池田庄太郎氏等。正式の名を大学相撲部となつてからの歴史にのこる人びとの名は、学生横綱猿丸、菅谷をはじめ手取、平井、心技体の調つた名將橋本、異能、岡本をはじめ多くの先輩が輩出し、相撲部長には学園の人物が数多くその名をつらね、初代大塚部長、二代難波部長、三代浅野部長の諸先生が精神面の指導

に当たられた。

戦後は原猛雄先生が部長に就任され、これより同志社の第二期黄金時代が築かれた。戦前、学生横綱を二人も生んだ同志社に、果すことのできなかつた団体優勝を、部の歴史五十年にして、初めて達成したのは昭和二十八年、時の主将石田が率いる精鋭は、日比野、小西、山口、森田、小池、町田等で、品位においても、また、知性においても申し分のない学生らしい相撲であり、常に強く、そして逞ましい、これぞ学生相撲だと世人から賞賛をうけた時代であった。

時移り、いまた第三期黄金時代を迎えた。前川部長執念の五年の歳月は、昨年から芽がふき、菅谷先輩より数えて四十八年

ぶり。戦後初の学生横綱、小兵ながら心技備わつた、すがすがしさを感じさせる中山の出現。身長一八七センチ、体重一五〇キロを超える巨漢実力日本一の谷川、そしてチームワークのよさで、各種大会で同志社に団体、個人の優勝を持ちかえる逞ましい丈夫が部をがっちり固めている。

八十年の伝統のなかに生まれ、そして流れているものは、敬愛とそして、豊かなる日々の稽古である。いまにして監督十九年の歳月は、ある時は長いようにも思われ、また逞ましい部員の活躍で、あつという間の年月であつたともいえる。同志社に入学をゆるされた日に、湯浅総長の式辞のなかで、同志社は教課の中で国語をマスターすることが第一で語学はその次ぎであると聞いた。相撲はスポーツの国語であり、これがために、いつまでもその道を追い求め、育ちゆく丈夫を見て幸せを感じる者である。

(大学相撲部監督)

ラグビーに学ぶ

坂 田 好 弘

青空の下を思いきり走りまわりたいという単純な動機で始めたラグビーがいつのまにか十三年にもなります。この十三年間の一部の部分をとりだしてみても楽しい思い出でいっぱいです。でも一人のプレーヤーとしてゆっくりこれらの思い出を振りかえる余裕ありません。今もラグビーを始めた頃と同じようにボールをもてばゴールめざして走っています。

一口に走るといいますが年々走ることにむずかしさ、厳しさを感じます。この走るという単純なことでも初めてボールをもって走った頃はただ走るために走っていました。でも今は走れるように走っています。ボールをゴールへはこぶという目的は今も始めてボールをもった時とかわりませんがその内容はずいぶん変わりました。

一つのプレーをするのでも一年目の人と十年目の人とは形は同じでも何かが違います。この何かは毎日の練習が積み重ねから得た、経験や厳しさや信念などです。スポーツではこの何かということが非常に大切なことです。この何かの違いがプレーヤーの価値を決めます。最近感じることはラグビーに関係のない色々な新しい知識や経験がラグビーに役に立っているということです。

ラグビーには豊かな人間性が必要です。御存知のようにラグビーは激しいスポーツです。ルールの範囲内でつきとばすこと、ぶちあたること等が許されています。もし一つまちがえば大怪我をしたり人命にもかかります。

ですからプレーヤー達は互いに相手の人

間性を信じ合ってゲームを行います。この互いに信じ合うということがラグビーでは大切なことであり、これがラグビースピリットです。

互いに信じ合うということはまず何よりも自分に厳しくなければなりません。

ラグビー王国といわれるニュージーランドで名プレーヤーといわれる人達と短い期間でしたが一緒にプレーできる機会を得て彼らのラグビーに対する厳しさというものを感しました。彼らの練習は週二回しかやりません。この二回の練習でコンディションを整えてグラウンドに立つのです。彼らにとってグラウンドに立つということは完璧なプレーをするということです。日本のように毎日毎日練習していてもよいコンディションでゲームするというのはむずかしいことです。まして二日間の練習だけでゲームをやり完璧なプレーをやるということはいかに日常の生活が厳しいものか想像がつきます。

彼らにとってラグビーとは自分自身との闘いのようにみえました。この厳しい態度がニュージーランドのラグビーの強さだと思

います。ただ単純に青空の下を走りたいというところで始めたラグビーから学んだことはかぞえ切れない位あります。

これらのことが社会人として今後の生活に役立つことと思います。本当にラグビー

漕艇部と伝統

ボート百年という一冊に「同志社は明治二十四年第一回水上大会を石山で開く」と記されている。以来八十年同志社大学漕艇部は長い盛衰を重ねてきたのである。昭和四十三年第46回全日本選手権大会に初優勝を遂げ、併せてメキシコオリンピックの代表クルーとなった時、各紙はこぞって、「七十七年目に花咲いた伝統」などと書きたものである。年月の長いことのみが目について何かくすぐつたい思いをしたものである。伝統とはおもしろいものでその体制の中にある者には却って自覚にくいものなのかも知れない。

をしていてよかったと思います。そしてラグビーの厳しさ、楽しさを教えてくれたラグビーの友に心から感謝したい。

(昭和四十二、経卒・近鉄ラグビー部)

四 方 久 男

近代スポーツは物理学、生理学に心理学の分野まで動員して徹底的に究明された上に系統づけられた一つの科学である。なかでもボートは単に人間が走る、飛ぶ、泳ぐといったスポーツに比べて科学への目覚めが一番早かったといわれている。にもかかわらず、なお切り札的なものがその中に残されている。一致団結全員の融け合った斗志である。ボートは完全な団体競技である。互いにクルーを信じ合い頑張り合う気持がなければ艇速をのばすことは不可能である。全員の融け合った斗志がなければ如何に優秀な体力用具があっても、また如何

に洗練された漕法があっても、たちまち破綻をきたすのである。

「一つに融け合った斗志」これこそ何ものにもかえがたい宝ものである。これ故にこそ、個々の力は共同の目的をもつ全体にまで拡大して素晴らしい力を発揮するのであり、この力が共同の目的に向って渾然一体の斗志をもやす時、その限界はいやが上にも高められていくのである。この一つに融けあった斗志を生み出した育み続ける母胎——これこそ本物の伝統だと考える。

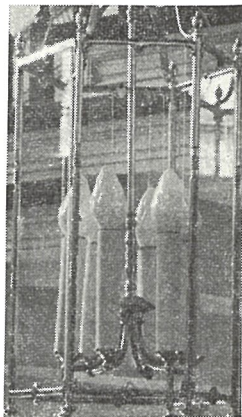
今や同志社大学漕艇部は長い歴史の中に徐々にはあるがこの母胎を築いてきたのである。これあればこそオリンピックに引きつづいて、翌四十四年の全日本大会に連続優勝をかざることができたのだと思っている。

しかしながら、まだまだ不安定なものであり、ちょうど机上に立てられた鉛筆のように、転ばなければ不思議なくらいのものである。一日も早くこれが堂々たるピラミッドに生長して名実共に日本一の漕艇部になるように精進を続けたいものである。

(大学漕艇部監督)

随

想



日 系 人 雑 感

園 部 望

この夏、約一ヶ月間、海外諸大学見学の
ため欧米を旅行する機会に恵まれた。その
際各地で接した日系人についての印象をご
紹介したい。勿論短期間であり、ごく限ら
れた少数の人びとにしか接していないの

で、これをもって全体を推測することは必
ずしも当を得ないと思われるが、ご容赦い
ただきたい。

× × ×

在米の一世は、その大半が明治、大正頃
の移民で、半世紀以上も彼の地にあり、太
平洋戦争中には、キャンプに収容された経
験をもつ人びとである。お逢いした人の中
には九十才をこえる方もあったが、どの顔
にも永年にわたる精神的、肉体的苦勞を忍
耐と努力で克服したしるしでもある深いし
わが刻まれていた。しかし今は二世、三世も
成長し、どの顔にもきびしい試練に打克つ
たものに共通の安らぎと落着きがみうけら
れた。概ね生活は質朴で、善良な米国市民
であるように思われた。ただ、思いは故国
日本や在米同胞のことにあるようで、現在
日本では見かけられない旧い版ぐみの邦字
新聞が相当広範囲に読まれていたのは興味
があった。また半世紀以上も米国にありな
がら、お粗末な英語しか話せない人が多か
ったのは、意外であった。おそらく、もっ
ぱら勤勞に従事していたこと、発音発声が
異り、なじめなかったこと、また人種偏見

などによる差別があって、日系人は日系人
ばかりで生活する傾向があったことなどに
よるのではないかと思われた。五十余年同
志社にあったデントン先生も日本語はお世
辞にも上手とはいえなかったことを思え
ば、已むを得ないといえよう。

× × ×

二世の人びとは、特に太平洋戦争中、敵
国人の一味と目されたり、人種差別をうけ
たことであろうが『わたしは米国人です』
と無言の主張をしているように感じられ
た。両親が家庭では日本語を話すことか
ら、日本語はわかるが、積極的には日本語
を使うことは避け、新しく世帯をもった二
世の家庭では子供に日本語を教えない傾向
があったのではないかと思われた。

× × ×

現在米国では黒人問題が大きな社会問題

となっている。黒人問題は人種問題の最たるものと思われるが、黒人の社会的台頭とともに、日系人もその地歩を進めたのではあるまいか。元来各国人種の協同体として自由と自治を求めて出発した米国で、今まで一部にあった根強い有色人種べっ視の風潮が、大きな転換期を迎えていることは否めない。他山の石としたい。

× × × × ×

三世で日本語のわかる人は少ないのではあるまいか。わたしの接した三世の大学生は、最近日本語を習いはじめたのだといっていた。そしてあまりにも父祖の国を知らないことを自覚、日本への深い関心を示していた。こういった日系人を、日本の大学で留学生として受入れる施策があつてほしいと思つた。

なお三世らが相寄り日本について勉強するとともに、一世の人々を慰労しようとの動きが芽ばえてきたことをここにご紹介したい。この運動が拡大され発展することを心から祈りたい。

× × × × ×

一世か長期滞在者か見わけがつかない

が、日本からの旅行者——最近急増したとのこと——を相手に、ひどいボロ賭けをしている日系人のあることも知っていたきたい。外国語に弱い日本人はどうしても日系人を頼りたがることから、その弱味につけこんでのあくどい商法は、一般外国人のそれより一層不愉快である。防止策はないものだろうか。

× × × × ×

ある大学を訪ねたとき、若い黒人女性に応接、案内に当たってくれた。あとでわかったことだが、この女性は日本生れで極めて日本語が上手、通訳の人も驚いたほどである。彼女の口から流暢な日本語がでるまで、大ごえで勝手なことをしゃべっていた人びとは、冷汗をかいた。『謹むべきは舌なり』と痛感した。

× × × × ×

欧米の観光地にはどこもこれも日本人が一ぱいである。それも若い人びとが多い。中にはヒッチハイクを計画しているものもあり必ずしも必要経費をもたず無鉄砲に出向いているものもあるようで、ずい分ひどいような人を見つけた。こういった人びとが

在外公館の世話になったり、現地人に迷惑をかけたりすることとなるのではないかと思われた。出国の際のチェックに良策はないものだろうか。国際人としての自覚と訓練が必要であると思つた。

(本部庶務部庶務課長)

音楽随感

中瀬古 和

この夏は、偶然相前後して来日した若い管楽器奏者達の演奏を聴く機会に恵まれた。

その人達の奏法や演奏態度には、音楽についての何か新しい考えを示唆するものがあったが、とりわけ強く印象に残るのは、フェッターというドイツの前衛作曲家の、自作のリコーダー曲の演奏であつた。それは二十人余りの晩餐の席上で、それだけがテーブルから少し椅子を引いただけという、ごく日常的な形で行われた。

バロック時代の音楽が一般の人の間で再

び注目され、その時代の楽器の復活も盛んになったのは戦後であり、当時の楽器（それを模して現代に作られたものをも含めて）で演奏してこそ始めて、作曲者の意図なり時代様式なりがわかるという、歴史的意義を、それは持っていた。古楽器については、私もそのような受取り方しかしていなかった。

素朴な音色と単純な構造を持ったバロックの笛、リコーダーから、フェッターは無心にありったけの可能性を引き出して行った。

幾年か前に手に入れた、海童道の法竹のレコードを、私は想い出さずにはいられなかった。

その解説には、それが普化宗の尺八から出たものであり、吹く人と竹とが一体となつて自然に没入する、といった意味のことが書かれてあった。更に私の興味をひいたのは、美しい音を出そうとすることはすでに邪道である。曲の意味に合せて楽器は手造りされる。

あるものは道ばたに捨てられた竹から、またあるものは物干竿を切って、などとい

うことであった。管楽器のための前衛作品と呼ばれるものには、現代西洋の楽器に、日本の伝統音楽の吹奏法を取入れていることが多い。

これまで気付かれなかった可能性を開発するという気持はわかるが、実際にはそうした個所に出くわすと、「またあれか」と、マンネリズムを感じないではいられない。ところがフェッターのリコーダー曲の場合にも、そうした技法が使われているのに、何の反発も起こらずに、その曲に引込まれて行ったのは何故だろうか。勿論それは曲自体が納得のいく構造を持っていたからでもあるが。

「あ、そうか」と心の中で叫んだ。ここに古楽器が現代に生きるもう一つの意義がある。リコーダーのような単純な構造の楽器から幅広い表現を生み出すには、一つ一つの音に努力がいる。そしてそれは必然的であり、すでにあるものをぶちこわして別なものを作ろうとするのではない。奏者は一つ一つの音を虚心に自分で創っているのだ。まして奏者と作曲者が同一人物である場合、その音楽のために音自体を創り出す

行為の内に見えざるものへの没入がある。

楽器というものには表現力を拡げるために、また表現技術を容易にするために、改良が加えられて行き、それが進歩というものであろう。しかしまたその進歩は私達を音楽について過保護にしてしまつて、生理的聴覚に注意が傾きすぎてしまう。そして心眼というように、もし心耳という言葉があるとするれば、それは失われて行く。それを取り戻そうとするのが本当の前衛音楽であらう。

古楽器に新しい光が当てられたことは、私にとってまことに清々しい体験であった。（女子大学教授・音楽理論、作曲）

無知たることは

弘 英正

かつての電気化学技術の総本山チッソも、今は公害企業としての虚名をのみ高くしている。最近思うところがあって、僕はそ

の「昭和五、六年までの間に北朝鮮の電力化学コンビナートを完成、いわゆる新興財閥が完成した」（『日本の化学工業』岩波）朝鮮窒素の時代を調べている。手近かな資料としては、まだ朝鮮総督府発行の月刊誌『朝鮮』しかないが、結構おもしろい。

昭和二年朝鮮に進出した日室は「我国第一の生産力を有し、内地最近までの総生産高に近き能力を有するもので、我國硫酸界を支配する重要工場である」（8年10月号）興南工場と赴戦江水電を建設する。厳冬は零下40の広大な高原の面積一・五方里、周囲十九・五里、貯水量実に二四〇億立方尺の貯水池、14万KWの松興里の第一発電所（4年9月号）とその偉容が語られるが、ちょっと気になることがある。

「貯水池の中に入るべき農家は三百四、五十戸で、已に代地を指定して立退を命ぜられてあるといふのに、彼等はどこまでも執着してゐることであつた。」（同号）その執着に対してどのような処置がとられたかは、民族的出版物としての『東亜日報』（金達寿「朝鮮」）等をめくってみ

なければならぬが、『日本統治下の朝鮮』の記述でも大体の察しはつく。

で、7年末の第三期工事完工の翌年に、朝室は電力不足で更に長津江水電（32万KW）を設立する。その一因が、山水特集号の紀行文の声を落した解説部分で語られている。

「此の高原はもと一面に落葉松の自然林で掩はれて居つたが、発電用の貯水池に水をより沢山流入せしむる目的で火を放ちて焼き払ひ切り倒して材木となし興南の工場の建築其他に使用した今も切株の点々として存在するのが認められる。其結果は予期に反して禿山のため、蒸発量の増加せるのと森林なきため水蒸気凝集せず従つて降水量減少せるのとで赴戦湖に溜る貯水量予定計画の如くならず。その後第二、第三の堰堤を赴戦江下流に築造して電力を用ゐて送水してゐる。けれども、発電所では尚予定の発電能力を発揮することが出来ないので従つて興南の工場に於ける硫酸の生産額が予定額に達しない。そこで其欠を補ふために長津江の発電工事が起つたのである。」（10年8月号）正に「砂漠は人間が作っ

た」のである。朝室の技術者は、生態学の常識を知らなかったのか。同じく今日、チツソの技術者は水銀流出を「知らなかった」ので過失責任はないという。無知たることは免罪符たりうろのか。

9月29日、新潟水俣病裁判において「チツソ水俣工場」とは製造工程が異り、同列には論じられない。」「当時、業界で工場排水を水俣病の原因と信じたものはなかった。」故に「会社には故意はもとより、過失の責任もない」としていた被告の敗訴が確定したが、患者の存在が明らかになつた40年暮、製造工程図を焼却した（45・10・6鹿瀬工場有機課長証言）ことによつて有機水銀の「生成・流出の有無を確定することができないことを、判決理由は遺憾としている。現法体系の下では、無知を装うことが企業にとつて有利になる。

来年一審判決の下る熊本水俣病裁判でも、原告は有機水銀に関しては「専門学者ですら知り得ない事柄であつた」（被告答弁書）その過失責任を注意義務で撃っている。「予見可能性は水俣工場の廃液が人体

（35頁へ）